

### 4-1-10-3 母性内科

#### 1. 概要、特色

母性内科も3年目を迎え、診療、研究面での方向性が確立されてきたように思われる。本年度、総合診療部成人期診療科の荒田医師が着任したことにより、産科が行っている妊娠初期の甲状腺機能のスクリーニングのまとめや妊娠中の自己血糖チェックのシステム化など、甲状腺疾患、糖尿病合併妊娠の分野で大きな発展があった。母性内科の主な仕事は**合併症妊娠・妊娠合併症**の内科的管理であるが、成育医療のセンターである当院の母性内科に求められている大きな役割として、小児期発症の疾患を成人期まで持ち越す患者、すなわち**キャリアオーバー患者の母性的ケア**があげられる。具体的に言うと小さい頃に行った外科手術が妊娠・出産に支障を与えないか、投与された薬によって生殖能力に問題はないかなどを考え妊娠・出産に向けて内科的サポートをしていくことである。今年は先天性胆道閉鎖症、先天性心疾患、てんかん、腎炎、気管支喘息などのキャリアオーバー女性の妊娠・出産にかかわった。特に先天性胆道閉鎖症術後女性の妊娠については第一専門診療部の消化器科、第二診療部の外科も加わった形でカンファランスを行い、治療方針を決めるというチーム医療が定着しつつある。

一方、発症年齢に関係なく病気をもつ女性が妊娠する場合の内科的ケア、すなわち合併症妊娠の管理も重要な業務である。若年女性に好発する甲状腺疾患・膠原病などの自己免疫疾患、慢性腎炎、若年性高血圧症などは病気が妊娠経過・胎児発育に大きな影響をおよぼすことがあり、また妊娠・分娩がきっかけで母体の病気が悪化することもある。さらに妊娠中毒症のような合併症（妊娠合併症）が出てくると、胎児の発育に大きな影響がでる。このように「母親とこども」を健やかな状態に保持するために合併症妊娠・妊娠合併症の管理が大変重要である。

母性内科単独で完結する症例はほとんどなく、合併症妊娠は産科・不育診療科・新生児科、非妊娠時には婦人科や不妊診療科などとの連携が必要となる。また、こころの診療部に関わっていただく症例も決して少なくない。キャリアオーバー患者においてはもちろん主治医である第一・第二専門診療部の先生方からのご紹介・サポートがなければ始まらない。このようにいろいろな科の先生方、コメディカルの方々と連携して総合的な診療を展開している。

#### 2. 診療・研究活動

##### 2.1 母性内科外来

月曜日から金曜日まで毎日行っている（月曜日は午後、火・木曜日は午前、水・金曜日は午前・午後）。

平成16年4月1日より17年3月31日まで当科外来を受診（初診のみ）した患者は917名で、のべ4162名であり、昨年に比べ3割増しであった。917名の内訳を表に示す。受診理由の主なものは**合併症妊娠、妊娠合併症**である。合併症妊娠のなかでは甲状腺疾患が最も多く、次に気管支喘息であった。妊娠合併症のうち主なものは気管支炎、高血圧、不整脈、耐糖能異常、尿所見異常であった。一方、現在は妊娠していないが体調を整えてから妊娠に望みたいという女性に対しても内科的診療を行っている。高血圧症、糖尿病など生活習慣病のある女性、関節リウマチ、全身性エリテマトーデスなどの自己免疫疾患を持つ女性をはじめ健康上の様々な不安を持つ女性が利用している。昨年に引き続き妊婦に対するインフルエンザワクチンの接種を積極的に行った。特殊外来の妊娠と薬相談外来は、本来独立させるべき存在であるが、今年度は母性内科の枠内で施行している。また、昨年度から開設された女性総合外来の受診者で内科的精査、加療を必要とする場合も当科が担当している。

表. 2004 年度外来（初診）患者の疾患分類

		主な内容
内分泌疾患	166	バセドウ病 31、橋本病 32、GTH、高プロラクチン血症
代謝疾患	59	糖尿病 18、妊娠糖尿病 17、肥満
膠原病	68	SLE11、RA10、シェーグレン 10、APS5、ANA陽性 7
血液疾患	18	ITP6、妊娠性血小板減少症、貧血、ALL寛解後
腎疾患	16	糸球体腎炎、尿路感染症、尿路奇形術後
神経疾患	15	てんかん 5、多発性硬化症 2、片頭痛 2
循環器疾患	73	先天性心疾患 4、高血圧症 19、不整脈 20、心電図異常
呼吸器疾患	56	気管支喘息 39、急性気管支炎
消化器疾患	45	肝機能異常、B型肝炎キャリア、先天性胆道閉鎖
ワクチン接種	164	インフルエンザ 157、風疹 6
妊娠と薬	150	
その他	87	アレルギー、女性外来からの紹介、産褥期体調不良

GTH：妊娠性一過性甲状腺機能亢進症 APS：抗リン脂質抗体症候群

## 2.2 特殊外来

今年度の大きな特徴として診療科、診療部をこえて連携した形での特殊外来を二つ立ち上げに関わったことが上げられる。一つは**女性総合外来**であるが、これについては別の項で独立して扱うのでここでは省く。二つ目は2003年12月にオープンした**妊娠・授乳と薬相談外来**である。これは薬剤部、周産期診療部、特殊診療部、治験管理室からなる合同チームが担当している。相談の内容について収集した資料を基にカンファランスを実施し、考えを統一した上で外来担当の医師と薬剤師が外来で相談者に説明している。2005年度から厚生労働省の事業として当センターが行うことになった**妊娠と薬相談センター**へ発展することとなり、その準備に追われている状態である。

## 2.3 病棟

平成16年4月1日から17年3月31日までに当科に入院した入院日総数は1606名と昨年度の6割り増しとなった。入院患者の主な疾患は抗リン脂質抗体症候群、全身性エリテマトーデス、シェーグレン症候群、糖尿病、高血圧症であった。産科入院の症例についても内科的問題をもつ場合には併診という形をとっているため実際はこの数字よりはるかに多くの症例の診療にあたっていたことになる。また、抗リン脂質抗体症候群の患者については不育診療科、産科と蜜に連絡を取り合いながら診療を行っていて、良好な治療成績を得ている。

## 2.4 研究活動

内科的なハイリスク妊娠の治療方法の臨床的研究を行っているが、今年度特筆すべきは特発性血小板増多症合併妊娠で、頻回に血小板除去療法を行い挙児に成功したという症例であろう。

甲状腺機能をはじめ妊娠中に特徴的な検査データの変動について検討を開始した。

インフルエンザワクチンの妊婦への接種の安全性についても検討している。

妊娠中の服薬の安全性に関しては厚生労働科学研究吉川班の分担研究として「妊娠・授乳中に薬物を使用した症例をデータベース化する手法に関する検討」というテーマで研究を行っている。

## 3. 社会的活動

平成16年9月15日 世田谷医師会にて「妊娠・授乳中の薬剤服用について」というテーマで講演を行った。

平成16年9月22日 和泉保健センター（杉並区和泉4-50-6）において「膠原病の治し方」というテーマで膠原病患者、保健師対象の講演を行った。